



「言葉の力」を中核とした学校づくり ⑮

「人間関係形成能力」を高める

◆ 経済開発協力機構(OECD)は、これからの時代を担う子供たちに必要な能力を「主要能力(キーコンピテンシー)」とし、その一つに人間関係形成能力を挙げています。

◆ 人間関係形成能力とは、言葉を適切に用いて人間関係を築き、維持していく力であり、その中核を成すのが対話に必要な言葉の力です。

◆ 筋道立てて分かりやすく話すことを苦手とする現代の子供たちの対話は、とかく単語の羅列やあいまいな受け答えに終始し、互いに相手の思いや考えを理解し合うといった本来の目的が達成されない場合が数多く見受けられます。また、子供は気の合う限定された集団の中でのみコミュニケーションをとる傾向が見られ、コミュニケーションをとっているつもりが、実際は自分の思いを一方向的に伝えているに過ぎない場合があります。

◆ こうした課題を解決するために学校は、集団の中で他者の存在を認識し、共に話し合い、学び合い、助け合うことの大切さを自覚させる必要があります。そのため、相手や場に応じた言葉遣い、挨拶や依頼・感謝の言葉、互いを認め合い励まし合う言葉など、日常的なコミュニケーションの見直し・改善から始め、各教科等でペアや小グループでの活動を積み重ねるなど、教育活動全体を通して計画的な指導を推進することが肝要です。



教師と生徒

実業家 洪沢栄一

今の教師と生徒との間に、昔のような師弟間の情誼(じょうぎ)、恩愛がないのはこれ今日教育界における大失点である。

今日の教師を視るに、その多くはただ文字を講義し、義理を伝授すれば本分を尽くしたものの如く考え、生徒もまたあたかも寄席にて軍談でも聴くような気持ちでおる。

出典：「洪沢栄一 一日一言 人間力を高める言葉」(致知出版社)

※ 情誼(じょうぎ)とは、真心、愛情のことです。